

・五月の連休

勤務医を続けながら小説を書いている。二十代後半から三十代にかけては、勤務を終えた夜、机に向かって原稿用紙一、二枚を書く体力はあった。狭い住宅のとなりの部屋では妻子がテレビのバラエティー番組を観て大きな声で笑っていた。そういう泥くさい環境のなかで書いているじぶんが嫌いではなかった。

しかし、五十もなかばを過ぎたいまでは体力が持たないから休日の朝しか執筆はできない。それでも、毎日書きたい欲求はついついくるので、毎年、五月の連休にはどこへも出かけずに朝から晩まで小説を書いている。

今年の連休には、妻がいくつかの用件をかかえて海のほうに行ってくれた。山国では口にできない新鮮な魚を食べるのを楽しみに機嫌よく出かけた妻を見送ってすぐ、机に向かい、なんとなく構想していた短篇小説を書き始めた。

朝は三時に起き、七時まで執筆。きちんと味噌汁のついた朝ごはんを作って食べ、昼前まで執筆。自転車でプールに行き、一時間泳いで帰り、朝食の残り物の昼食を食べて仮眠。午後二時から六時まで執筆。冷蔵庫のなかにあるものを適当に調理して夕食とし、また十一時まで執筆。

こうして四日間、小説を書くためだけの生活をしていたら、なんだか禅寺で修行をしているような心境になってきた。言葉が頭のなかでうごめいている。

・老人の肺炎

歯と歯茎の間には細菌が繁殖しやすい。また、歯茎と接する頬の内側の粘膜も細菌の棲みかになりやすい。このあたりが汚いままだと、眠っているあいだに口のなかの唾液などに混じって細菌が気管に流れ込む。ものを飲み込むとき気管に蓋をする働きは歳とともに衰えるから、高齢者ほど口内の細菌が気管に入りやすくなり、それが肺炎を起こす。むかしから、年寄りの肺炎は熱が出にくく、症状がはっきりしてきたころには重症になってしまっているのが注意が必要だ、と先輩の医師たちから教えられてきたが、実態はこういうことだったらしい。

ならば、歯と歯茎の間を丁寧にみがき、頬の内側の粘膜を専用のスポンジなどでやわらかくこすり、時間をかけてうがいをし、口内を清潔に保っておけば肺炎はけっこう予防できる。

・パニック障害

もうすぐ四十歳になるところでパニック障害を発病し、病気のひとの訴えを聞いているとこちらもおなじように具合が悪くなってきた。患者さんの身になって考えられる医者がいい医者だ、という言い回しをよく耳にするが、慎重に吟味してみるとこの言い方はどこか変だ。

患者さんの身になって症状に共感していたら、医者の方も体調が悪くなってしまわないか。そういう医者が冷静な判断や的確な治療ができるものなのだろうか。

・芥川賞受賞とうつ病

しかし、芥川賞を受賞した翌年、三十八歳の秋にパニック障害を発病し、やがてうつ病に移行してからは、このままでは医者を続けられなくなる、病院の住宅には住めなくなる、と真剣に悩み、とりあえずそのときある預金で作れるだけの家を建てた。

芥川賞受賞作を収めた本がよく売れて、その印税が使えたのが大きかったが、何事も得るものがあれば失うものがあるのだと痛切に身にしみたのもこのときだった。受賞作家としてのレベルを保った作品を発表しつつ、病院の勤務医としての生活を乱さない。あとからふり返れば、なんとも危険な綱渡りをしていたのであった。

新築した家に住んでからもうつ病の快復は思わしくなかったが、なるべく外

を歩き、となりの住人と会話をした。妻は小柄の童顔だから、近所のひとたちの目に、散歩中の夫婦は、病気の父親に孝行娘が付き添う姿と映っていたらしい。

・早期退職制度

この病院に永く勤めるとは思ってもいなかったので、定年制度のことなど忘れていたら、何年か前に早期退職制度が導入された。医師の場合、三十年以上勤務して五十五歳以上ならば通常の退職金に相当額を上乗せして支給するというものだった。

これだな、と決めた。

臨床の医者をやりながら小説を書くのは歳とともにつらくなってきた。あなたの代表作は、と問われたら、次の一作、と答えたい意地はいまだに棄てられないから、もうそろそろ小説に専念すべき時期がきている。じっくり腰を据えて長篇を書きたい。テーマを決め、きちんと構想を練り、ある一家の三代にわたる物語なんて書いてみたい。

ところが、退職時期をじぶんで決めるのは案外難しく、高齢のひとたちの含蓄に富んだ言葉を聞ける外来の場を去るのも寂しくないと言えは嘘になるから、なかなかふんぎりがつかなかった。ひとが生きて死ぬナマの現場と絶縁するのはじぶんも死んでしまうようで、業の深い仕事なればこそ未練たっぷりだった。

そこに早期退職制度である。時代の流れに乗ればよけいなエネルギーを使わなくてもいいから、五十五歳で定年と決めて日々の診療にはげんだ。なんだか一日一日がとても大切に思えてきた。

ところが、この制度は二年ばかりでふいに廃止されてしまった。いろいろな理由が挙げられたが、要するに、有能な人材が洗出しすぎてしまうらしい。

思う存分小説を書きたかっただけで、べつに有能でもない医者は、退職のきっかけを失い、ずるずると居残っていまに至っている。

・自己開示の手段として小説

信州の田舎町にある総合病院の研修医になって二年目に長男が生まれた。このころから、他者の生死の問題に深く介入する医者という仕事をもたらすストレスの激しさに耐えかねていたのも、自己開示の手段として小説を書き始めた。高校時代から、なんとなく文学に関連する職に就きたいとの漠たる想いを抱いていたゆえでもあった。

平日は十五分ばかりで夕食をすませ、自室にこもって深夜まで、丁寧に言葉を探しながら原稿用紙一、二枚ずつ書いた。休日にはそれらを読み直し、推敲し、さらなる展開を考えているうちに一日が終わっていった。

こういう自己本位な日々だったから、当然、育児にも家族サービスにも無縁な夫、父親になった。次男が生まれた年には髪ふり乱して子育てに追われる妻を残し、カンボジア難民救援医療団に参加してタイに行ってしまった。

ひとが死ぬ、永遠の不在になるという圧倒的な現実を目にしていると、その他の世俗的な価値の調整がどうでもよくなって、語りだす言葉も本音むき出しになる。不機嫌で社交下手な夫を相手にする妻の苦労はいかばかりだったか。

第百回の芥川賞を受賞した翌年、三十八歳の秋にパニック障害を発病し、以後はうつ病にからめとられて、医業も書くこともできなくなり、それこそ生きていくだけで精一杯の事態に陥った。

・病んだ身

この時期、自殺しないでいるのが精一杯だったから、絶対に死んだらいけませんよ、と、あえて教科書どおりに口にしてくれた新米精神科医の言葉や、おまえは二人分の仕事をしてきたのだからあとはゆっくりやれ、とぶっきらぼうに言い放った先輩医師の忠告のありがたきは忘れない。けれど、どれか一つの言葉に救われたとの想いはなくて、語らないけれど、病んだ身の存在そのものをとりあえず容認してくれたひとたちがいたからいまでも生きていられるのだと痛切に感じる。役立たずになったと見るや、接する態度を豹変させたひとたちもいたが、それはそれで人生の大事を教えてくれた貴重な方々であった。

本を開く元気が出てきたころエピクロスを読み、心身ともに平静な状態「快」を生き方の基準に据える彼の教えが文字どおり身にしみてきた。「**快樂主義**」の実態は酒池肉林に遊ぶことではなかった。「快」を得るためには節制をこころがけ、静かに暮らさねばならない。

・せっかく書いた1章を削除

小説を仕上げたとき、思い入れたっぷりの作者から冷静な読者に変身するためにはそれ相当の時間が必要であるのは、四半世紀も虚構を書き続けて身にしみているから、この際は第一読者であるベテラン編集者の意見を尊重する。涙をのんで、貴重な連休を使って書き上げた**一章を削除する**。でも、あとで短篇に仕立て直せるかもしれないから、と大事に保存しておく狡猾さは忘れない。

・人混みを避けたい

父親の転勤に付いて上京したのは東京オリンピックの翌年だった。高いビルの群れに囲まれて暮らすものとばかり思っていたら、多摩地区の社宅の周囲にはまだ畑が広がっており、東京の第一印象は安心と落胆とが複雑に混ざり合った消化の悪いものであった。

それでも、電車やバスを利用する通学を余儀なくされ、とくに大学受験浪人のときは都心の予備校に通わねばならなかったから、**腸が過敏な身**にはこたえた。口だけは達者だが、ひとごみのなかで自由にトイレに行けない状況には極端に弱い若造だった。

満員の通勤電車に乗ると必ず腹痛を起こしていたゆえ、東京で仕事に就くことだけは絶対に無理と決めてかかり、ならばどんな田舎に住んでも食っていけそうな医者になろうと思いつめた。若くして弱点をさらけ出していたこの身を生かし続けるために、**田舎者にならざるを得なかったのだ**。

・書く動機

吉行淳之介が好意的な選評を記し、遠藤周作は、ひょっとしてと思ったほどである、とまで書き、すぐそこにニンジンが来たのに、食べそこなった馬の気分になり、これを含めて四回もおあずけをくらったせいもあって芥川賞候補という宙ぶらりんな身分に疲れてきた。小説を書く。文芸誌に載る。芥川賞候補になる。あるいは、ならない。

こんな、受験勉強のようなことをするために小説を書き出したのだろうか。もっとせつぱつまった、**書かなければ生きてゆけぬ理由**があった気がする。たとえば、医学校を出てすぐ臨床の現場に押し出され、他者の死を見ざるをえない状況に圧倒され、この現状をだれかに知ってもらわなければ死の持つ不気味な引力に引きずられるまま異界に墜ちてゆきそうな不安にさいなまれ、懸命に原稿用紙に向かい始めたのではなかったか。